

268 号

10 月例会のお知らせ

日 時 : 10 月 15 日 (土) 19 時半～21 時半
 場 所 : 府中町屋倶楽部
 内 容 : 来年の絵暦の紹介

旧暦『絵暦－越前の里の虫たち篇』紹介

津郷 勇氏 (福井高専名誉教授・環境都市工学)

大阪ご出身ですが、越前市の村国山の麓に住い
 されて以来、長年に亘って村国山の虫や草花を写
 真に収めて来られました。その写真を見せていた
 だきながらお話を伺います。また凡そ 70 年に及
 ぶ句歴の俳句も魅力です。

■二十四節気「白露」から「秋分」に掛けて、
 よく雨が降りました。普通この季節は台風シー
 ズンではありますが、今年はその被害も大きく、
 暗いニュースが目立ちました。

9 月中に一日中晴れだった日は 6 日しかなか
 ったという報道を聞き、改めてその湿っぽさに
 驚いています。10 月 8 日の「寒露」まで、秋
 晴れが恋しい気がします。

■平成 29 年旧暦『絵暦』が現在印刷段階に入
 っています。多くの方に愛用していただけます
 ように、会員のご協力をお願いいたします。

■故郷にこだわった絵暦を発行して 24 年目の
 今年は、身の回りで見られる小さな虫たちを取
 り上げてみました。この旧暦のカレンダーは、
 月の満ち欠けを基本に作られたものです。明治
 初年に旧暦から新暦に代るまでは、私達の生活
 の中での月の存在感は相当大きいものだった
 と思われます。もっとも新暦で生活するようにな
 った現代でも、竹垣に使う竹を切るのは、「新
 月に近い時がいい。なぜなら、この時竹の樹液
 が根の方に流れ、地上部の繊維が密になって、
 病害虫を寄せ付けず、長持ちする。」と言いま
 すし、「建築資材は満月から三日目の十八夜か
 ら下弦の月までに伐採すると木が水分を少し
 しか含まないため、虫もいず、乾燥させても繊

維がよく締まり材木のもちがいい」とも言われ
 ています。自然農法が見直されてきた近年、月
 と自然の営みの関係が改めて注目されていま
 す。今年の絵暦では、古来日本の文学作品に現
 れていた虫のように、私達の生活の中で親しみ
 のある虫たちを紹介しています。この絵暦をご
 覧になり、月の変化を楽しみ、野に出て虫を探
 してみようかなど、思っただけであれば嬉しく
 思います。『枕草子』の「虫は」の段では「す
 ずむし、ひぐらし、てふ(フウ)、まつむし、き
 りぎりす、はたおり、われから、ひをむし(カ
 ゲト)、ほたる、みのむし、ぬかづきむし(コ
 ヲキ)、はえ、なつむし、あり」などの虫が取
 り上げられていて、どの虫も嫌悪感を持たずに、
 語られています。また、十篇の短編からなる『堤
 中納言物語』の中の「虫めづる姫君」では、虫
 好きで、恐ろしげな虫ばかりを収集し、観察し
 ている姫君のことが描かれています。その虫を
 見てみると「てふ、かはむし(ケムシ)、かいこ、
 いぼじり(カキリ)、かたつぶり(カツムリ)、けら、
 ひくさ(ヒキガエル)、いなご、あまびこ(ヤブゲ)、
 くちなは(ヘビ)、せみ、はたおりめ(コオロギ)」
 など今だったら虫には入れないカエルとかへ
 ビも虫の範疇に入れています

(平成 29 年『絵暦の楽しみ方』から)